

あの日、津波が 持っていったものと持ってきたもの



サンビレッジ高田

陸前高田市高田町字山苗代
サンビレッジ仮設 岡田憩子

あの日、「落ち着いたら、家に帰ろう。」そんな軽い気持ちで離れた海辺の我が家は、今では瓦礫置き場となり、鍵は 30 年余り慣れ親しんだ我が家の、唯一の記念品となりました。

家は失えども、家族は幸いにも無事で、皆でサンビレッジ避難所に身を寄せることにしました。避難したばかりのころは、砂がたくさんあるコートの上にブルーシートやダンボールを敷き、その上にわずかばかり

の毛布に身を寄せて寝ていました。あの広いところにストーブはブルーヒーターが二つ。果てしなく寒く、天井があるだけありがたいという世界でした。寝るのが早いため夜が長く、朝が来るのが待ち遠しく感じたものでした。

しかし、朝を迎えると今度は、夜ストーブで室内の温度が上昇したことによる、外気との寒暖の差で、屋根から結露がポタポタと落ちてきて、「ここには天井があるのか、ないのか……？」の世界、そんな風にして私たちの避難所暮らしは始まりました。その後、一家族にひとつずつテントを支給され、プライバシーが守られた遊牧民のようなテントで約四ヶ月生活したのです。

サンビレッジ避難所は、炊事班・清掃班・警備班などに分かれて自分たちで運営する、とても自治的な避難所でした。その中で炊事班に入り、一日おきに約百人の三食を準備しました。自宅での炊事とは違い配給された、今ある食材から何ができるかを考え、大量の食事の準備することは、今までになかった経験で、嫌になることもしばしばありました。少しでも、季節を感じとってもらおうと、春には山に行ったらの芽などを採ってきて、てんぷらをあげたこともあり、言葉というのは



不思議なもので『おいしかったよ。』とみんなから言われると、急に疲れも飛びました。避難所で暮らした四ヶ月間、風邪を引いて体調を崩す人もほとんどなくすごすことができたのは、「炊事班のみんなの英知を結集してみんなの健康を守っていたからだ。」と、自己満足しています。

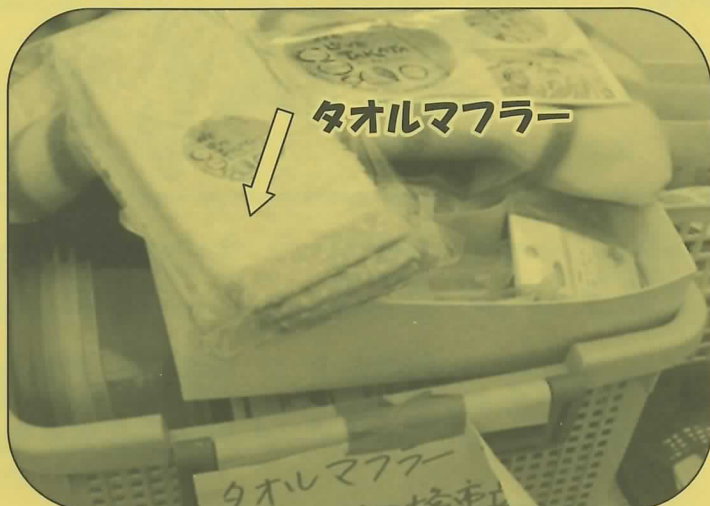
また、私たちの避難所では「一本松プロジェクト」というのを立ち上げ、陸前高田市と高田松原の復興、そして女性の笑顔のためにという趣旨で、避難所に届けられた支援物資をもとに、いろいろなものを作っていました。私も、タオルマフラーの縁縫いを手伝い、サンビレッジ裏の仮設住宅に入った今も手伝っています。

若い人たちから「タオルを買った人たちが、『タオルマフラーの縁がすばらしい。』と言っていたよ。」とか「たくさんの人が、『これ、手で縫ったの』と話していたよ。」などといわれると、長年の技を世間から認められたような気持ちになり、うれしくなります。

避難所での暮らしでは、あまり話をしなかったような人とも、一つ屋根の下で暮らすことにより、遠い親戚よりも近い間柄になったような気がします。小さな子供も、自分の孫のような気がして『行ってきまーす。』とランドセルを背負って元気に学校に行く姿を見送るのもうれしかったし、逆に気分が悪いようにしていると「どうしたのかな？」と心配になったりしました。人が大勢いるということとは、我慢しなければならないこともたくさんあり、窮屈なような気もします。しかし、それ以上にいろんな人が集まっているからこそ、「知らないところで助けたり助けられたり、ちょっとした一言で元気をもらったりして生きているんだな。」としみじみ思いました。

今回の震災では、今まで培ってきた多くの物を持っていかれてしまい、正直途方にくれました。しかし、長い人生で一度も体験したことのないことや、味わったことのない感情に気付き、疲れを感じながらも、「普通に暮らしては、気付かなかった何か。」を持ってきてもらったような気分にもなる今日この頃です。

※ 岡田憩子さん原稿有難うございました。津波で失ったものは数えきれないほどですが、その後の貴重な体験に心から敬意を表します。



「一本松プロジェクト」紹介

岡田憩子さんの文書にあった「一本松プロジェクト」とは、高田町のサンビレッジ避難所や仮設住宅で生活している方々が、①1人では小さな力でも、それぞれの個性や長年の経験や技を生かしてできることはないか。②今、私たちの生きがいになることはないか。③故郷や美しい高田松原を再生するために何かできることはないか。そんな思いから、このプロジェクトが始まりました。

主な活動は、支援された物資を有効活用したり、支援者のお力を借りて「一本松グッズ」を作り、収益の大半を松の苗木の購入費用などに充当するプログラムです。

一本松プロジェクトのホームページ <http://www.ipponmatsu-pro.com/>

仮設住宅のパトロール1ヶ月 対談

8月1日から大船渡市・住田町・陸前高田市へ2班編成にて、90団地4047戸のパトロールが始まった。2週間の訪問活動を振返って、今後の支援に活かそうと8月23日反省会を行った。

★パトロールの感想は

①地元の支援団体と聞いて安心してくれた。津波の数日前に娘の住む大船渡市へ仙台から引っ越し被災した。知人も無く困っている人がいた。②団地の自治会長に会って引きこもりの人を聞くようにしている。③困っていることはないが、

話し相手がほしい人が多い。

④竹駒町上壺団地に、子ども夫婦は第1中学校団地、70過ぎの自動車もなく体調もすぐれない女性が一人住み、買い物や通院に困っている人がいる。仮設入居の受付の際に、この様な方に、日常生活の困らない場所への入居などの配慮が出来なかったのか。

★仮設団地のよいこと

①ベンチやテーブルを野外に置いている団地が多くなり、高齢者等が集まって話し合っている姿が見える。そのベンチ

も太い丸太のままなど、粗末でも素敵な場所になっている。総合運動公園予定地では、ベンチを利用し毎日午後5時になると中央通り出身者が集まっている。ベンチの無い仮設もあり普及させたい。②団地内の舗装が始まっている。③駐車場

もフリー（障がいしゃを除く）にしているところ、決めているところとまちまちであるが、来客者の駐車場や2～3台の世帯などスペースが無く困る。④住田町火石団地には各戸に給湯器が設置している。⑤団地では「お茶会」が開かれているところが多い、孤独生活者を無くすためにも大切なものである。

★これからの課題は
①仮設住宅の不具合や修繕などの連絡先がわからない人が多いので、連絡先を書いた貼りだす用紙が必要だ。②玄関の風除室の活用方法に、なるほどと感心する住宅もある。のき下の改善や物置の要望が多いだけに、よい利用方法を普及させたい。③自分で棚づくりや玄関などのちょっとした大作業が出来ない人へ、材料費だけで工事してくれる人がいないのか。④郵便ポストを望む団地が多い。⑤賑やかな団地と淋しい団地とはっきりしてきたので、淋しい団地への支援が大切である。⑥民間アパートや雇用促進住宅へ入居した被災者への支援が少ない。⑦日中仕事へ行って不在の若い方々への支援も少なく何かよい方法を見つけない。



団地内交流会



火石団地の給湯器

ビタミンB郡の豊富な豚肉で夏の疲れをとる料理「なすと豚肉の重ね焼き」

■材料（2人分）

豚肉（薄切り）200g
なす（中）4本
チーズ50g
しょうが（せん切り）30g
塩 小さじ2/3
コショウ 適量
万能ねぎ（小口切り）適量
油 適量

男の料理



■作り方

①豚肉は長さ10センチくらいに切る。なすは厚さ7～8ミリの斜め切りにする。②なすに小さじ2/3の塩をふって、全体を手であえる。③フライパンに薄く油をひき、豚肉、しょうが、なすの順に2回重ね、最後にしょうがをちらす。④フタをして、中火より少し弱めで10分焼く。⑤ひっくり返して器に盛り、コショウをふり、万能ねぎを散らす。※途中でフタを開けると、色が悪くなるので注意！ 豚肉はバラ肉がおいしい。カロリーが気になる方は脂身の少ないモモ肉などを使ってもよい。

資料提供：川原智子さん（管理栄養士）



お茶会(於竹駒小)

仮設住宅の付帯設備や修繕 要望の連絡先

岩手県では「応急仮設住宅保守管理センター」を（財）岩手県建築住宅センターに委託し、仮設住宅入居者からの設備の不具合や修繕等についての要望を受け付けています。

連絡先：応急仮設住宅保守管理センター 電話 0120-766-880

死別・離別の悲しみ相談ダイヤル

大切な方との「死別・離別による悲しみ」に、少しでも寄り添うことができたらず、遺族支援に取組む民間ボランティアが開設した電話と手紙の相談窓口があります。

電話 0120-556-338

毎週日曜日 10:00~20:00/毎月11日 10:00~24:00

手紙 〒102-0071

東京都千代田区富士見町2-3-1 ライフリンク内つづり箱宛

障がいのある方、介助が必要な方

電話 0192-27-6203

被災地障がい者センターおおふなと

内容

- ・物資 福祉機器・生活用品等の提供
- ・介助・介護 外出のお手伝い・見守り
- ・送迎 通院・買い物・墓参り等

◎すべてのことはできない。

できる事だけをする

私も一言

後世に伝えたい津波の怖さ

大船渡市三陸町 岡沢隆祐

私は平成18年に妻に先立たれ、20年9月に私の不注意による本宅から離れの建物まで全焼し、今度の大震災では家は残ったが、家の中は海水とドロだけ。親たちと働いて現在になるまでの財産は皆無、涙も力して出ない。振り返って見れば、生まれる時も裸、弱って天国に旅立つ時も裸。何を目標に働いて来たのか、頭の中も裸で言葉が出ない。自分を初め被災に合った方々は、長い年月をかけて、1千年に一度と言われる大津波にも、また、大雨による山津波にも心配のない、住宅地を求めて行かねばならない。安全、安心をモットーに、これからの人間社会を築くためには、さけて通れない命の道ではないでしょうか。「人生まさに七転び八起き」である。



南嶺仮設団地



東北に届け 沼津の心意気 沼津の花火

沼津市のみなさん ありがとう！

立根小学校 6年 鈴木佑昌（ゆうすけ）

3月11日、帰る準備をしていた時に地震、机の下にもぐりおさまるのを待つ間とても怖ろしかった。校庭に出て、迎えに来たお母さんを見た時はホッとしました。僕の家も学校も無事でした。それから小学校で炊き出しが始まり、僕もおにぎりづくりをしました。

7月30日から2泊3日で沼津市からの招待事業へ、立根小学校から6年生24名と先生1名がバスで参加しました。1日目は東京で国会議事堂の中を見学しました。すごくびっくりしたのは天皇陛下の部屋にトイレまでありました。夕食会場に向かうバスの中でスカイツリーが見え

ました。いよいよ沼津市に到着しました。夜の歓迎会では、マグロの解体ショーやマジックショーなどを見せてくれました。2日目の午前中は工場見学、夜は花火大会、栈敷席で見た最後のナイヤガラに感動しました。3日目に富士山の五合目へ行きましたが、霧がかかって富士山は見えませんでした。この招待参加は、人生で忘れられない日となりました。沼津市の皆さん大変お世話になり本当にありがとうございました。

※招待事業とは、大船渡市教育委員会へ沼津市や相模原市など8市ほどから、生徒の招待申し入れがあり、大船渡市では修学旅行として受け入れることにし、6年生の参加となった。沼津市夏まつり実行委員会では「子どもたちに少しでも元気になってもらうために」と企画し、沼津市民の協賛金を募って実施した（沼津市のHPより）。

編集後記

8月号には中越防災安全機構の諸橋さんに「仮設生活は復興へのバネ」。今月号は岡田さんから「もっていたものと持ってきたもの」と大変参考になる原稿を

頂いた。巨大津波による被災地へ全世界から支援の手が述べられている。この支援に応えるためにも、これからの人生をしっかりと踏みしめて進みたい。（岩）